



中区栄1丁目

竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書

(岡山病院地内)

1984

名古屋市教育委員会

中区栄1丁目

豎三蔵通遺跡発掘調査概要報告書

(岡山病院地内)

1984

名古屋市教育委員会



目 次

本 文

調査に至るまで	1
調査の経過	2～11
遺 構	12～15
遺 物	15～17
おわりに	17

図 版

図版 I	地 図	(地図 1、1 : 5,000)
図版 II	遺構断面図	
図版 III	遺物実測図	(特に註ない限り、1 : 4)
図版 IV	遺跡写真	1
図版 V	遺跡写真	2
図版 VI	遺物写真	1
図版 VII	遺物写真	2

例 言

1. 本書は、名古屋市中区栄1丁目3002番に所在する竪三蔵通遺跡（市遺跡台帳番号7-4）の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は昭和58年5月17日から同年9月7日にかけて実施した。
3. 調査は名古屋市教育委員会を主とする「竪三蔵通遺跡調査会」が主体となり、教育委員会文化課学芸員を調査担当者として実施した。直接の作業は、同調査会からの委託を受けて、大成建設株式会社名古屋支店が実施した。
4. 調査区域の図化は、ヘリコプターによる空中写真測量によった。実施したのは国際航業株式会社である。
5. 調査実施にあたり、土地所有者であり事業者である社団法人喜峰会岡山病院はよく文化財保護の主旨を理解され、調査経費を負担していただいただけでなく、いろいろな便宜をはかっていただいた。理事長岡山義雄院長、直接折衝にあたられた岸上香理事をはじめ、病院関係者から寄せられた御理解・御支援に感謝の意を表したい。
6. また施行者大成建設には現場事務所の提供をはじめ、多くの御援助をいただいた。やはりここに記して謝意を表するものである。
7. 名古屋大学文学部考古学研究室、櫛崎彰一教授には、隣接してお住いのこともあり、親しく現場で御指導いただいた。
8. このほか、御援助・御指導をたまわったのは、愛知県教育委員会文化財課をはじめ、以下の方々である。（敬称略）

愛知県教育委員会文化財課・加藤安信、同中川真文、愛知県陶磁資料館・井上喜久男、同仲野泰裕、名古屋都市高速道路公社、名古屋市見晴台考古資料館・木村有作、平出紀男、山田敏一、伊藤正人、中野良法

調査に至るまで

豎三蔵通の名称は、堀川沿いに尾張藩の藩倉があったことに由来するが、豎三蔵通遺跡は昭和45年頃、愛知県教育委員会による分布調査で発見された。調査者の記録が必ずしも十分でなく、愛知県遺跡台帳では不明となっているが、地元詳しい人の話では、土器片がかなり散布していたとのことである。

その後、昭和56年、名古屋市教育委員会が実施した分布調査の際、弥生式土器や中世陶器の破片などが採集され、時代と性格を知る手掛りが得られた。ただし、この時点では台地斜面で遺物がひろわれたことから、遺跡の範囲を台地南端ぎりぎりと考えていた。

昭和57年末頃、この遺跡範囲北限に位置する岡山病院の、新病棟建築についての情報がもたらされ、また、当時同病院の他の工事を手がけていた大成建設の関係者から、現地在遺跡地か否か、遺跡地であればどのような手続きが必要かなどについての問い合わせがあった。

これに対して、当該地は南半が遺跡範囲内であること、従って北半も隣接地として埋蔵文化財包蔵の可能性が高いこと、事業実施に先立って事業者負担で発掘調査の実施が必要である等の指導を行なった。

その後、同病院からも岸上理事を通じて問い合わせがあり、この中で病院側の事業計画の概要が知らされた。それによると、掘削必要面積は1,000㎡を上まわる可能性があること、建設を急いでいることが判明したので、調査能力などの問題から教育委員会が直接実施せざるを得ないと判断し、見晴台考古資料館との協議を行なった。

発掘費用は相当の額にのぼり、その負担や調査実施の時期・方法等について病院側と再三協議を重ね、一方で愛知県教育委員会の指導を受けながら検討を続けたが、病院側も文化財保護の意義を理解され、実施について合意が得られた。

調査時期については、当初病院側の新病棟建設計画が急がれたため、4月末を予定し調整したが、その後建設計画の手直しや、現実に使用している駐車場を閉鎖する等の関係からずれ込み、5月中旬から実施のはこびとなったが、今度は見晴台考古資料館の事業予定や、他の調査との折合がつかず、文化課が直接実施することとなった。

調査の経過

当初、発掘調査は5月初旬に開始ということで調整が進められたが、駐車場として使用中という事情もあり、電柱移設等の関連諸工事の経過から下旬にずれ込む結果となった。この間、駐車場入口を北西側に新設するに伴い、若干の掘削の止むなきにいたった。この時の観察によると、地表下60cmは攪乱表土、その下20～30cmが黒褐色砂シルトを組成とする包含層であった。

予定面積960㎡のうち、約 $\frac{1}{3}$ は若干時期をずらせて掘削することになり、まず北側の調査区の攪乱表土を機械によって掘削開始をしたのは5月20日のことである。試掘調査の結果から予測されていた通り、攪乱表土はほぼ全面にわたって40cm程、包含層は20cm程度であるが、部分的には攪乱掘り込みが地山にまで及んでいた。また、特に調査区西側で、攪乱表土直下に径20～30cmの河原石丸礫が一面敷設されてある状況が認められたが、掘削に立ち合った関係者の話によると、当該地が駐車場化される以前はバレーボールのコートとして使用していた時期があり、そのころ排水を良くするために敷設したものとのことであった。一部で包含層上面の遺物が露出したため取り上げたが、江戸時代の常滑鉢（植木鉢？）であって、試掘調査の結果から予測したものよりも新しかった。

表上除去が終了したところで発掘区を設定した。調査の原因が病棟新築であり、既設建物に接続する予定であること、幸いにこの建物がほぼ東西の主軸を有することから、これに平行する東西線を設定して、発掘区の主軸とした。そして、発掘区の北西隅に基点を置き、東西・南北いずれの方向にも4m間隔の杭を打ち、グリッドを設定して、各グリッドとも北西の杭を基準とした。

発掘は北西部から開始した。発掘区の北側は現建物の地下通路を遮へいするコンクリート塀があるが、その基部から1m弱はこの塀構築の際の掘り方による破壊が連続している。これは東の方が幅広く、深い。この東の方で、攪乱の範囲を確定し、残存部分との境を明瞭にする目的で掘り下げていたところ、4mほどの中で暗青灰色砂シルト層にあたり、この中からややまとまって陶器片が出土した。

北東隅に現在車庫があり、ここを掘り残すことにしたので、この部分の断面をまず

削り去って観察したが、この時点では前述の暗青灰色土層の性格を明らかにするまでには至らなかった。

一方、当初掘削範囲の東半分ほどは、かつて木造の看護婦宿舎が建っていたとのことであり、相当破壊されているものと考えていたが、案に相違して残り具合は良く、攪乱はゴミ捨て穴と思われる、整然と掘られた長方形の穴で、ここからは古タイヤなどが出土した。

更に、この掘削範囲の中央西寄りにも攪乱土壇があり、焼損瓦片が多量につまっていたので除去したほか、漆喰で囲いを固めた遺構が3ヶ所ほどあって、地山面にまで達していることがわかった。

また、全面にわたって、攪乱表土を除去した直下は10cmほどの層厚で、灰褐色砂質土層がひろがっていることも判明したが、当初この層の性格、時期を明らかにすることができず、作業に若干の支障を来した。

この原因の一つを成したのは、前記の瓦を出土した土壇の状況であって、瓦の埋設が攪乱土直下60cm付近にまで達したが、この深さでの土が灰褐色砂質土であっただけでなく、更に下までこの土が及んでいて、一見攪乱土壇中の填土がこの土層であると考えられたことにある。

このため、各グリッドに散在する攪乱土壇内壁を清掃して、土層の関係を把握することに重点をおき、作業範囲を拡大してみた。その結果、この灰褐色砂シルト土層も安定した堆積層で、陶磁器を包含することが確認され、それとともに、北西では薄く南東でやや厚いこと、これを掘り込んで発掘区の北西から南東へと斜めに走る溝と、この土層の最上面に据えられた礎石と思われる偏平な河原石群が検出された。

前者についてみると、北西端近くではその一方の壁に沿って河原石群が、これは密に連続してあり、溝内は漆喰片、陶磁器片等を含んで汚ない。ただし、基本的組成は灰褐色砂シルトであるため、その肩を必ずしも明瞭に把握し切れなかった。

礎石とみられる河原石群は、発掘区全面の清掃が進むにつれ全体が判明したが、北の一群と、南の群の2つのまとまりが認められたほか、明らかに深さを異にするものがあり、またその周囲に細長い溝状の掘り方を有するものと、石ぎりぎりの大きさの円形掘り込みのものとは、やはり別々の群と考えられた。この石群は大部分が灰褐色

砂シルト土層の最上面にあつて、そのまま置いておくことは作業に支障を来たしはじめたので、現病棟屋上から写真撮影するとともに、平板で位置を図化したうえで外すことにした。この作業をするについて、各石のまわりを丁寧に清掃してみたところ、



石の据え方の違いのほか
に相当な状況の違いが判
明した。灰褐色砂シルト
上面に一段のみ据えられ
たものとその下に2~4段
が重なつて認められるも
の、発掘区の北西から南
東へ、前述の溝に平行し
て連続するものと、ほぼ
東西に並ぶものがある。

礎石群の位置を図化し、はずしてから再び発掘区の北半では掘り下げをはじめた。掘りをはじめてもなく、区の北東から南西へ延びると思われる、大きな溝が検出された。この溝は、その埋土上部が灰褐色砂シルト、即ち上部の遺物包含層と同一のため一部グリッドを深く掘り下げるまで確認できなかったものである。規模が大きいとみられることから、作業安全上特別な工法が必要かどうかを判断するために、直交すると思われる位置でトレンチを入れた(図版II、図2)。この結果、上部幅員4 m近い規模で、調査時の包含層上面からの深さ1 mほどの整然と掘られた逆台形のものであることが確認できた。しかも図示した層は水分を含んだ暗青灰色砂シルトで、普段水がたたえられていたと考えられる状況で、濠とみなすことにした。この暗青灰色砂シルト層の上面で鼠志野の大型向付が出土した。

発掘区の北西隅近くに100×80cmの長方形で垂直な側壁の大きな土壇が検出されたが、これも填土が暗青灰~褐色を呈し、水がたまっていた状態のあったことがうかがわれる。この土壇では、包含層の上面から1,300cmの深さに顕著な鉄分の沈着が認められ、またこの深さに大型の木片が集中して検出された。

全体に灰褐色砂シルトが掘り下げられるにつれて、その下の黒砂中の土器が散見す

るようになったが、特に前記の濠の西側北寄りで顕著であった。

5月31日、駐車場使用の便のため掘り残しておいた南の3分の1の表土除去と、攪乱部の清掃確認をはじめた。この南区の東南隅では、旧バレーコート直下に瓦が厚く堆積した下から大型の、いわゆるお通い徳利や飴釉の双耳壺など、良好な状態の陶磁器が多量に出土した。

この南区南端は、試掘調査の時点で土が柔らかく、攪乱の溝があるのでないかとのコメントが添えられていたところであるが、予測通り南端の東から3分の1ほどのところから西へ延びる溝が検出された。これ以外にも南区は全体に攪乱が多く、前半の表土・攪乱土除去の作業量が多くなったため、北区の作業を一旦中止して、南区のペースを北区に合わせることを急いだ。

この作業終了後、北区ではグリッド間のセクション観察用畦の選別と清掃を行ないながら、一部遺構の検出をはじめた。そのうち、南区の表土除去を開始する以前に北区の中ほど西端、発掘区外壁直下では、灰褐色砂シルトの中に、5cm厚の漆喰の板に囲まれ円形で縁端黄白色、その下緑色の器形不詳のものが埋設されている遺構があった。これを注意深く検出してみたところ、口径10cm、器高15cmの広口の壺であった。

どのような性格の遺構か判然しないので、注意深く掘り肩の検出を試みたが、漆喰の内外とも同質の灰褐色砂シルトであったため、確認できなかった。念のため、壺の填土を別にとってある。

南区でも包含層の掘削をはじめてまもなく、礎石群が各所で次々に検出された。この礎石もいろいろな様相を呈する点は北区のものと同じだが、斜め配置の群はないほか、大きく深い掘り込みを有する礎石は北区にはないものである。これを掘り下げたところ、下に大きな瓦片を敷き、石が2段に設置されていた。別の例では、礎石と考える丸い河原石の下に花崗岩大礫が設けられていた。

北区の北西端近くから斜めに南東へ延びる最も新しい溝は南区にまで至って、南東隅大土壇のすぐ北、発掘区東壁に消えている。この溝の南区内の一部では、溝底に漆喰の厚板が敷設されているところもあった。この溝の北端で溝に沿って連続していた河原石は、その他の部分では検出されなかった。

南区でも包含層は基本的に灰褐色砂シルトと、その下の黒砂であったが、北区に比

較して灰褐色砂シルトのひろがり狭く、かなりの部分で表土除去後、直ちに黒砂という状態もあった。この様な状況の中で、南区北側の中央付近で中世陶器が黒砂上面に集中して存する部分を確認された。

また、南区の西端は地山面が極めて高く、表土除去後の清掃段階で直ちに基盤面が露呈、これを掘り肩とする住居跡様の掘り込みも確認された。更に掘り進むにつれて住居跡が相当数検出され、特に南区西半が著しい。

濠内から出土した鼠志野向付は、その後出土した志野皿とともに、現場近くにお住いの名古屋大学橋崎教授にお見せしたところ、文禄頃とのことである。このため、濠内の暗青灰色砂シルトの堆積、従って濠として機能していた時期が戦国時代以前と判明し、城砦跡の可能性が出て来た。そこで、この濠が平面形状は湾曲して西壁に至るので、この西壁直下の部分をまず調査することとした。

ここは、早くから濠の延長部でないかと考えながら、横切るように地山黄色砂シルトブロックを主にした土があって、一見別物とも思わせる状況であった。掘り進めると、黄色砂シルトブロックのベルトは、灰褐色砂シルトと同一レベル、即ち暗青灰色砂シルトの上面に乗る位置関係であることがわかった。但し、この西壁直下では暗青灰色砂シルト層は必ずしも明瞭でなく、また濠そのものも深度浅くなり、両岸の傾斜も緩くなっていた。

この頃（6月上旬）南区では、全面に攪乱がひろがっていることから、堆積状況観察のための畦を選別し、図化しないものは相次いで取り壊すことにし、作業のしやすさを確保することに努めた。但し、それを急いだ結果、一部で掘り下げられた地山に切り込んでいる遺構の確認があいまいになったところのなしとはしない。

ほぼ中央付近の西壁直下で、やや湾曲しつつ西から東南へ延びる溝が早くから確認されたが、発掘グリッド（4 m×4 m）を一つ越えた先では地山面がかなり高く、溝が続いている状況でないことが判明した。そこで、発掘区西壁の清掃・分層作業を兼ねて直下にトレンチを設定してみたところ、ここでは相当に深いことがわかり、1 m幅のトレンチでは下までさげきれないことが判明した。従って溝状遺構であることが確認され、発掘区中からはじまり、西へ延びるものと考えられた。取りあえず、この溝の平面形状を確認する作業を急ぐことになった。

一方、北区の東北端近くで、大量の陶磁器を出土する大きな土壇が検出された。南区東南隅の土壇と出土物の構成が共通するところ多く、状態の良い陶器・磁器であることから、最近の攪乱遺構と考えていたが、気にかかる遺物もあることから榑崎教授や、愛知県陶磁資料館の学芸員にみてもらったところ、予想とは逆に近代のものではなく、江戸時代一杯のものということであった。これは、この2つの土壇にとどまらず灰褐色砂シルト層中からの出土遺物も殆どがそうであるとのことで困惑したが、後述する如く、この地の特殊性からこのような遺物の限定性が確保されたのであった。

なにはともあれ、発掘地区全体が良好な遺跡地で後世の攪乱が殆どないことが確認されたため、勇躍調査にあたることになった。6月中旬の重点は西端（発掘区内での）が確認された濠の調査においたが、一方、このころには発掘区全体で住居跡が複雑な切合い関係を伴って確認されつつあり、調査員の負担は大きかった。

濠は6月10日から全長にわたって掘削を開始した。層序は単純で基本的には2層しかないことがわかったが、上層の灰褐色砂シルトはもともと堅いうえ、夏の太陽に照らされてますます締り、唐鍬やツルハシの使用によるしかなかったが、一方その中にかなりの遺物を包含しているところもあり、作業は容易ではない。これに加えて両岸上でも遺構の確認・検出が行なわれ、排出土の現場からの除去に困難があった。

西端と北端から掘り進むという作業方針をとったのだが、西端部分では土師器の良好な状態のものが多く出土し、その後、炭化物・焼土を多量に伴って手捏ねの小型のカハラケ、銭、小刀子状の鉄製品がまとまって出土するという状況に遭遇し、大幅に作業が遅延した。

濠以外の作業では、南区中央付近で顕著な貼床構造を持つ住居が、複数の住居と切り合って検出され、作業員の作業ペースが早いため確認の手掛りを得ないままに、重要な箇所が削られてしまうことがままあった。

南区中央西壁下で確認され、発掘区内にはじまって西へ延びる溝と考えられた遺構は、その外形を確認しつつ掘り下げていったところ、南岸は垂直に近く掘り込まれていたのに対し、北岸は半月形状の段が3段切られており、また全体の形状も西壁直下で既に狭くなり、半月形を呈することがわかった。そのため、一気に全体形状を把握するとともに、底部まで掘り下げることとし、堆積断面を図化し、写真撮影を行なっ

たうえで、作業を行なった。充填土は柔かく掘り易かったが、掘りはじめると大型の遺物が多量に出土し（図版Vの2）、作業が中断しがちであった。掘り終えてみると、西壁直下で底部も一気に上がり、ちょうど発掘区内におさまった半月形状の池と考えられるものであることがわかった。底部には焼成不良で灰黄色を呈する甕が口部を上にしてあり、また建築部材とみられる大型の木片が存した。これらは実測段階まで残しておく方針であったが、木材は後述の大浸水時に浮上し、原位置を失ったため、やむなく撤去に至った。

6月中旬に至り、各グリッド全体が掘り下げられて間の畦が高くなった。雨が降り出して崩壊の危険があるほか、高いために作業中の移動に困難があり、層序を点検したうえで後日図化する必要を認めるもののほかは、発掘区全体にわたって畦をはずすことにし、また攪乱ピットは掘り終えることにした。そして、これが一段落したところで、灰褐色砂シルトを埋土とする遺構から検出作業を開始した。

6月20日から21日にかけての雨で発掘区全体が大浸水状態となった。攪乱のため締りの良くない南端溝の壁は大きく崩壊したが、そのほかは殆ど影響がなかった。唯一例外は北西隅近くの長方形の深い土壇で、大きく南壁が崩壊した。崩壊した状況をよく観察してみると、熱田層最上面赤色シルトはそのまま残存し、その下の砂層が大きく崩壊している。従って、周辺の遺構にはとりあえずさほどの損害はないが、下部が大きく抉られていて、この土壇自体の調査は当分できそうもないことがわかった。なお、この後もたびたびの雨で浸水状態となったが、南壁を除いてはほとんど影響もなく、南壁もあえてその後垂直に清掃をするようなことをしなかったので、崩壊量もたいしたことはない。

この排水後、発掘区全体の中よりやや東寄、北から南へ一直線に延びる溝のあることが確認された。これは上部幅員60cm、深さ50～60cm、底部幅員40cmほどの逆台形の溝で、黒砂を埋土としている。埋土の状況や、包含する遺物がほかの溝状遺構と大きく異なるため、黒砂中での掘り肩を確認することに努力したが、ついに確認することはできなかった。

また、この溝よりやや西の中央付近で、黒砂中に黄色地山シルトを貼って肩を作った掘り込み内の、この肩に沿うようにまとまった量の山茶碗等の中世陶器・土器が出

土する遺構が確認された（図版Ⅴの1）。両側が攪乱土壇で断ち切られていて、長1 m程度であるが、状況からみて住居跡と判定し、とりあえず出土の遺物群を実測し、黒砂を少し掘り下げたところ、甕を埋め込んだ焼土塊が検出された（図版Ⅲの12）。これはこの住居に伴う炉跡と考えられる。さらに、この住居から少し離れて、別の甕を伏せた炉跡（図版Ⅲの11、図版Ⅴの4）が見つかっており、この場合は掘り込みや、造り出しの肩などはないが、やはり住居に伴ったものでないかと考えている。

6月下旬からは、遺構検出の準備のために畦の清掃と層序観察を行なった。また、濠の掘削作業が進行して屈曲点を越え、西半部分に入りはじめたため、濠中心線にはやや斜交するが、発掘区基線に沿った部分で再度堆積状況を測図した（図版Ⅱ、図1）。

この時点になって、現病棟コンクリート塀に沿った攪乱土清掃中に認められた暗青灰色砂シルトは、濠のものであることが確認された。この濠の北端部は肩が不明確になっていたが、その原因は東側肩部を削るようにして、濠に直交する方向の長方形土壇が掘られていたためであった。この土壇からは多量の炭火物とともに、瓦製の火入れ、大型の摺鉢など江戸時代の焼き物がまとまって出土した（図版Ⅳの5）。

また、発掘区中央付近で正円形の土壇として確認されていた遺構を掘り下げてみたところ、井戸であることが判明した。中からは細片の遺物が多く出土したが、良い状態のものもあった（図版Ⅲの13、14）。もともとは木枠があったのでないかとみられる痕跡が壁面にみられるが、2.5 m深掘り下げたところで、危険防止のため作業を止めた。従って、深さは確認できない。井戸は以下殆ど同様である。

7月に入り、大溝の掘削は更に進み、また同時に両岸壁・底面の清掃も行いつつ西進したが、その途中、屈曲点付近で大型の方形土壇2基を底面に確認した。東壁直下に、壁に沿うよう心々で2 m離れて掘られた同形同大（60×100cm）の土壇で、埋土は暗青灰色粗砂・シルトであったが、遺物は全く存せず、時期等を明らかにする手掛りを欠く。

住居址はますます増加し（20軒を越す）、しかも複雑な切り合い関係にあって、床面上の土器を残しておいて確認の手段としたかったが、掘り進めることが困難になって来たので、実測しながら順に取り上げることにした。ただし、このためには調査員の絶対量が不足するため、愛知県教育委員会文化財課の担当者の派遣を要請し、これ

に対応することとした。幸いにも同課では状況を理解され、専門職員の派遣を実現していただいたので、遅滞なく作業を進めることができた。

全体に、当初は新しい攪乱のものと考えていた陶磁器を出土する土壇群が殆ど江戸時代のものとなり、散在しているが、そのうち最大のものである東北端近くの土壇の掘削も7月7日に開始した。ここは、雨の時の水溜めとして利用していたのであるが、崩壊の兆が見えたので手をつけたものである。多量の陶磁器が出土した。

7月中旬に至り、いよいよ全体で遺構を掘り下げはじめた。南区では、住居跡内貼床の写真を取り、その下のピットを掘りはじめた。

また、ピットそのものが貼り床を有する（あるいは一旦蓋をしている）ものが見つかった。そのうち一例では、灰褐色砂シルトの埋土を除去したところ、黄色シルトを貼った床があり、これを抜くと更に下から長30cmほどの長三角形黒色花崗岩礫が5ヶ埋められていた。これら以外に目立った遺物はなく、性格を知る手がかりはない。

一方、黒砂を埋土とした溝を掘り進めるにつれて良好な遺物が出土したが、特にその肩から掘り込んだピットから良い状態の遺物が得られた（図版Ⅲの9・10、図版Ⅴの5）。埋土は溝と全く区別のつかない黒砂で、この遺物から溝のある時期が押えられるのではないかと思われる。

7月中旬、全体で畦、発掘区外壁の清掃と層序断面の測図を行なった。雨にもたたられて、予想外に時間を消費した。

この時点になって、病院側から「発掘区域を調査後一時的に駐車場として使いたいが、そのため一定量の土を現場に残して欲しい」旨の申し入れがあった。施行者である大成建設の担当者に可能性を計算してもらい、ほとんどピット掘りを残すのみになる7月20日前後からは、土砂の搬出をやめることにした。そして、発掘区東側の空地に積み上げることとし、一輪車を使用した。

各種ピット、土壇はほぼ全域にわたって確認されていたが、住居跡の分布にはかなりの偏りがある。濠で半円形にかこまれる北西部分と、中央から南西にかけてに多く、北東は少なく、南東にいたっては1軒も存在が確認できない。

井戸が6基検出されたが、そのうち壁に木枠の跡らしいものがうかがわれるのは1

基のみであった。また、前述した発掘区北東端近くの江戸時代大土壇内の井戸は底まで掘ることができたが、現状地表からの深さが3 mを少し超える程度であった。

濠の西端・南岸上に幅員40cm、深さ40cmの、ほぼ両壁が垂直で真直に東西に延びた溝がある。この溝は、その中に90cmおきに20cmほど更に深くなるピットが掘り込まれているが、遺物は殆どなく、時代・性格とも不明である。

また、前述の江戸時代大土壇のすぐ北、発掘区北東端で浅い黒砂埋土の土壇が確認され、中から多量の古墳時代須恵器・土師器が出土した。なかで目立つものは角状把手の甗があるが、この土壇を含めこの調査区域内では甗の角状把手が多く目についた。

8月に入り、ほぼ全域で遺構検出を終えたところで、写真撮影のための清掃を開始した。この頃は炎熱のさ中であり、清掃のためには撒水の必要があるが、水をまいては蒸発のいたちごっこの感があった。清掃は濠に囲まれた北西から開始したが、困ったのは夕立ちで、ひとしきりザッと降ると、清掃したばかりの表面が一面粉をふいたような状態となり、ピットなどの輪郭が不明瞭になってしまうのである。

8月9日、すぐ南の若宮大通、都市高速道路1号線の工事現場に設けられた基準点から、光波測距儀を使用して、座標系を設定した。これは、後述するようにこの岡山病院地を中心とする一帯、豎三蔵通遺跡が後世の攪乱の少ない、良好な江戸時代武家屋敷跡の可能性が考えられるため、将来の調査の利便を考え、今調査区域を国家座標系にのせることにしたためである。

清掃中、南区の南西近くの住居跡で、幅広い周溝の中に径5 cmほどの小ピット群が2列に一面並列している状態が確認された。この遺構を持つ住居は2軒見つかったが、従来南区の見晴台遺跡、瑞穂区瑞穂遺跡などで一部確認されている。

中旬にまとまった休みをとり、その後また清掃と掘り残しピットを掘る作業を続けて、9月に入り、現場を写真測量で測図することになった。直前に、区の北西端に掘りっぱなしで中途放棄していた長方形ピットの掘削を試みたが、やはり条件が悪く、ついに放棄のやむなきに至ったことは残念である。

9月2日、ヘリコプターによって現場の写真撮影を実施、その後、発掘区域の外周壁の層序断面図を作成し、6日、現場の全作業を終了した。

遺 構

調査前、本遺跡は弥生時代の集落跡といわれ、また試掘調査の結果からは古墳～奈良時代の集落と考えていた。調査の結果はむしろ、江戸時代の遺跡地として貴重な成果を得た。以下、各時代の主な遺構について、簡単に述べたい。

1. 古墳時代から奈良時代

わかっている住居が7軒、それに南北に長く伸びる溝である。住居は全て隅丸方形～長方形竪穴住居で、規模は大小ある。残存状態にもかなり差があり、西壁にかかって3分の1ほどが調査対象となった1軒は、壁高が30cmほどの良い状態であった。また、前述した幅広周溝で、溝内に2列の小ピット群を有する住居のうち1軒も確実にこの時期のものだが、柱穴と思われるピットはいずれも深さが60cmを越え、掘っていると肩まで入ってしまうほどである。

この住居では、西壁の残り具合が良く、これに接してかなりの厚さの焼土があってここから糸切底の杯（図版Ⅵの5）などの良い状態の遺物が出土した。

溝についてみると、区のほぼ中央付近で溝底が最も高く、そこから南・北へそれぞれ下っているが、幅員・両岸の傾斜とも全体を通してほとんど変化がない。また、その埋土も、包含層としての黒砂であって、従ってこの溝がどの深度から掘り込まれたものか判明しないのは先に述べたとおりである。南端近くで、この溝の東岸にあった古墳時代の炉の焼け痕が溝の肩に至っており、この炉が使用された時点では溝が開削されていたことを示している。より詳細には、遺物の精細な分析をまたねばならないが、溝内は普段に水がたたえられていたとは考えられない。集落内を細分する目的で掘られたものと思われる。

2. 中 世

住居が1軒確認された。残っていた構造からみて、竪穴式住居に属する形態のものと考えられる。黒砂を床面として、地山黄色シルトをつき固めて壁を構築している。中央部には土師甕を口縁を下にして埋設し、炉としている。この住居は、壁に沿って残存していた一連の山茶碗からみて、鎌倉時代初頭のものとする事ができる。

ところで、この岡山病院内での調査と並行して行なわれた隣接の栄小学校内の調査

では、平安時代の遺物がまとまって出土した。これに対して、当調査区内で平安時代の遺物は殆どなかったことを注意しておきたい。

3. 近世、近代

まず顕著なのは北端中央付近から大きく屈曲して西壁に至る濠である。整然と掘られた逆台形状で、上部幅員4m、深さ1mを測る。底から20cm～40cmの厚さに暗青灰色砂シルトが堆積しており、この濠に水がたたえられていたことがうかがわれる。この土層中から文禄頃の鼠志野向付が出土し、その他の遺物も美濃編年の大窯終末期頃ということであり、従って、この濠が少なくともこの時期には機能していたことがわかる。

大きく屈曲する地点付近の濠底に60×100cmの大きな土壇が2基検出された。遺物が全くないが、そのあり方は濠に関係したものであることは間違いない。濠を越す橋に関係した遺構ではないだろうか。

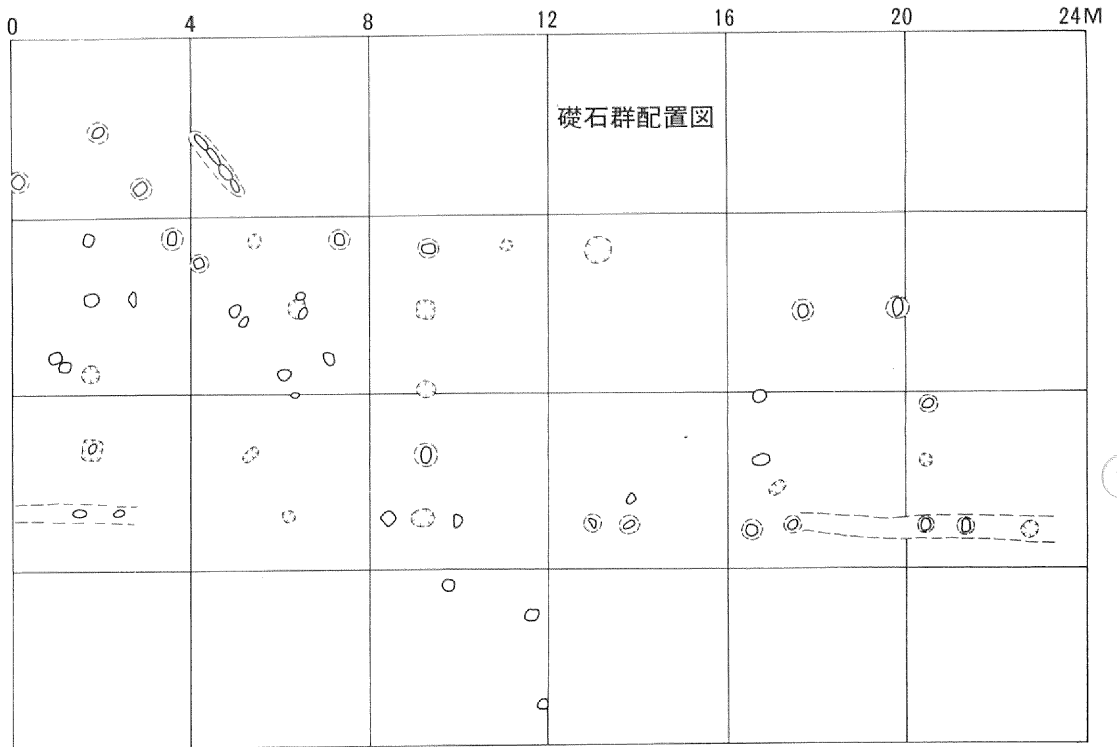
これが推測にとどまるのは、濠がある時期に一気に人工的に埋められているからである。前述したように、濠の上部は遺跡全体の上部包含層である灰褐色砂シルトであり、濠の全体形状はこの上部包含層の除去が終るまでわからなかったのである。即ち江戸時代に入り、ここを屋敷地とするに際して埋めたものと考えられる。

この濠は、その使われていた時期、形状・規模等からして城砦遺跡に伴うものと考えられるが、現在管見する限りではこの付近に存在した記録がない。しかし、この地は名古屋台地の南西端であって、西に低地帯をひかえ、南は河谷をへだてて日置・大須の地（日置城あり）と対した戦略上の拠点である。城があって当然ともいえる地理で、今後文献調査を急ぐ必要があるだろう。

江戸時代のこの地がどのような地であったかについては、蓬左文庫所蔵の数枚の絵図で知ることができる（図版Ⅰの2、3）。それによると、このあたりは尾張藩御船奉行千賀氏をはじめ、御船方配下の屋敷が並んでいたところである。

これに対応するかのように、今次発掘区中にも江戸時代に属すると考えられる各種遺構がある。

まずとりあげる必要があるのは、建物跡と思われる礎石群である。前述したように礎石群は南北2群に分かれる。次頁にそのうちの北群の配置図を示したが、これによ



ると柱間3.8～4 mという変則的な数値で、発掘区内では2間×5間という配置の建物が考えられる。不思議なことに、南側の礎石列は90cm間隔の2個の石が一組という印象を与える配列となっている。

これに、便槽でなかったかと考えられる常滑窯甕の配置がうまく重なる。ただし、おもしろいことには、南北群いずれの場合も今次調査区内の礎石列中に、常滑窯甕の埋設が2～3箇所となる。そしてまた、これらがいずれも焼成不良の赤褐色～黄褐色を呈するものであることも、気になる特徴である。

南礎石群の西端やや離れて、半月形状の池がある。これも中から多量の遺物が出土しており、江戸時代末期か遅くとも明治時代はじめ頃には人工的に埋められたものと考えられる。

井戸が6ヶ所ある。礎石群と関連ありそうなもの4基、はずれるもの2基である。江戸時代大土壇中で検出した1基を除いては、崩壊の危険があって、底部まで調査しなかったことは、先に述べたとおりである。全て円形形状で、少なくとも半数は素掘りのままであったと考えられる。埋土は全部灰褐色砂シルトで、少量の遺物が出土した。底部まで掘り下げれば、もっと出土したかも知れない。

性格不明の浅い土壇がある。池のすぐ東北脇にあたり、一辺3 m程度の方形プランを有し、緩い傾斜の掘り込みである。地山黄色シルトブロックを主体とした埋土で、瀬戸摺鉢の良好な大片のまとまった出土をはじめ、江戸時代陶器がこの埋土中から得られた。

このほかに江戸時代の遺物を多量に出土した遺構としては、発掘区南東隅の土壇や北東端近くの大土壇があるが、これらは明治初頭、この地の屋敷が放棄された頃に一括して埋められた可能性もある。

これらの上面に乗る遺構が、区の北西から南東へ走る溝と、これに並行する礎石群である。当初、これらの方位を他と全く異にする遺構群が何であるのか、全く見当がつかなかった。ところが、たまたま手にすることのできた『名古屋大学医学部90年史』中に、明治10年にこの地に開設された愛知県病院（明治14年以後、愛知病院）の病棟配置図があり、これによると、まさしくこの斜め方向の病棟だったのである。

遺 物

遺物はコンテナに90箱ほどを得た。最も多いのは江戸時代陶磁器であり、また時代的には古墳時代から、最も新しいところで愛知病院時代のものまである。遺構と同様に、時代順に簡述する。

1. 古墳時代～奈良時代

須恵器・土師器のほか、若干の石製品がある。遺構に密着したものとしては、住居跡床面上のもの、炉跡埋設のもの、ピット内・土壇内のものなどがある。

須恵器には蓋杯、甕、高杯、短頸壺、甗、糸切底杯などがあり、時代的には6c後半から奈良時代後期に至る（図版Ⅵの3、5）。

土師器にはもう少し古いものがあり、量的にも須恵器より多い。器形としては埴、高杯、甕がある（図版Ⅵの1、6、8）。

特殊なものとしては、紡錘車が3点ほど出土している（図版Ⅵの2）。うち1例は須恵器で完形であるが、2例は石製である。その中の1点は、いわゆる滑石製品であり、底面（台形断面）に斜線文、斜面に斜格子文が刻されている（図版Ⅵの4）。

2. 中 世

中世の遺物は最も量が少ない。まとまって出土したのは住居跡内一括の遺物だが、山茶碗は小皿1点が完器のほか、いずれも底部破片のみである。猿投地区の茶碗で、鎌倉時代初頭に属するものと考えられる。この住居内の炉跡からは、土師器甕がふせた状態で出土した（図版Ⅲの12）が、山茶碗の時期によって所属する時代を与えて差し支えないとみなしている。

やはり炉内に伏せた状態で出土した別の甕は、焼き戻されたものかと思うほど、灰白色で焼成が悪く脆弱である（図版Ⅲの11）。形状は腰の張りのない細長いものでないかと思われる。

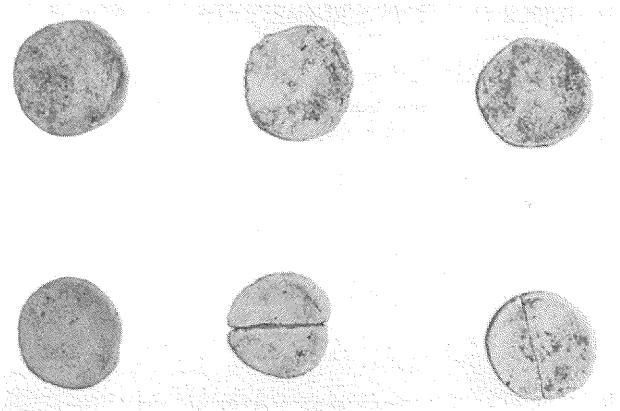
3. 近世・近代

いわゆる桃山陶器としては、志野製品が殆どである。しかも愛知県陶磁資料館学芸員井上喜久男氏によると、大窯終末期から登窯初期のものが多いということであった。

天目茶碗も各期のものがあるが、図示のものは最も新しい（図版Ⅲの16、Ⅶの5）時期のものである。このほか多量の陶磁器が出土した。今後、注意深く整理作業を行いたい。

4. その他

時期不明のものに、浅い糸切底をもつかハラケ（図版Ⅲの1～6、図版Ⅵの7）、手捏カハラケ（右写真）がある。これらは、濠の西端からかなりまとまって出土した。その状況は前述したとおり、多量の焼土・炭化物を共伴し、また銭（寛永通宝、洪武通



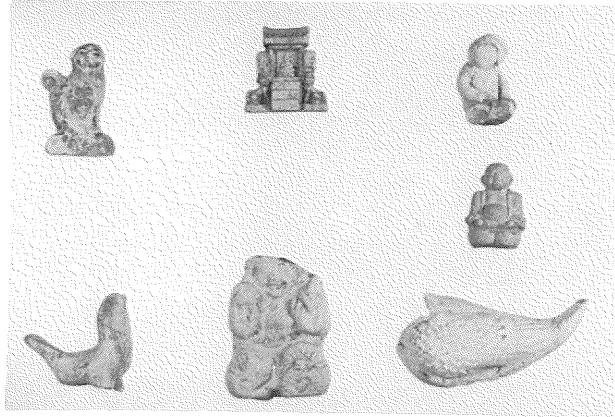
宝）、刀子状鉄製品などを伴い、あたかも神前のまつりを執り行ったあとの如くである。

糸切底のカハラケは小さいもので口径6 cm弱だが、手捏カハラケは殆どが径4 cm以下で、整形は雑、焼成も不良である。

糸切底のタイプのうち、2例、底部に焼成前に穿孔したものがある。南へ下った都市高速道路工事現場（旧紫川遺跡）からは逆に、手捏のもので焼成前穿孔のものが出

土しているが、地理的にも近く、また手捏カハラケの形状・大きさ等は全く共通することから、注意しておく必要があるだろう。

泥人形の類に種類の多いこともあげておく。右写真にその一部を示すが、中の上・神社は中実堅緻な焼成のもので、高4.2cmを測る。



愛知県病院、愛知病院のものとしては、白色硬質陶器や磁器の上に名称を付したものの（茶碗・同蓋、皿など）のほかに薬瓶と考えられるものがある。また華麗な帆立貝形状のイギリス製磁皿片もこれに関係するものの可能性がある。

中国磁器も若干破片が出土している。竜泉窯系のものと、白磁のいわゆる玉縁碗のタイプである。ほかに緑釉の破片も数点存する。

おわりに

従来、弥生～古代の遺物散布地として知られて来た豎三蔵通遺跡であったが、江戸時代絵図面を立証する屋敷跡と、多量の江戸時代陶磁器を出土したこと、ことに明治に入り、直ちにここが名古屋大学医学部の前身の地となり、大正年間にそれが鶴舞へ移るまで一貫して病院地であったこと（即ち一般住居地として、その後の生活什器が混在することのなかったこと）が実地に確認されたことは大きな収穫であった。

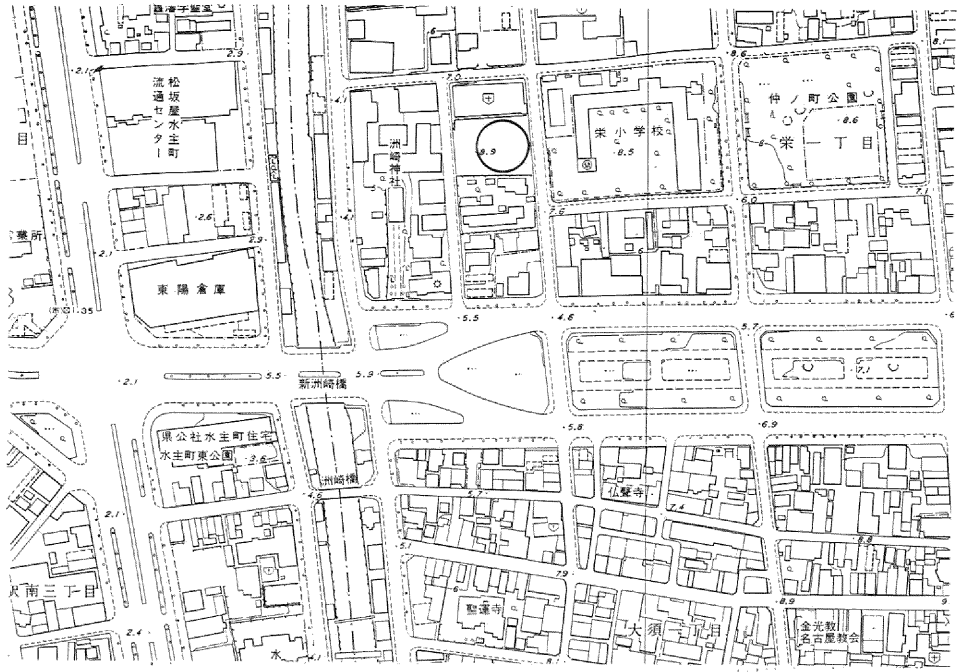
名古屋城下町の低地帯部分での残存状況については、先年の小鳥町遺跡概要報告書に記したところだが、台地上でも条件次第でこのように良好な状態で残存していたことは驚きであり、今後の文化財行政にとって良い資料を得た。

なにぶんにも我々の生活実感に結びつく時代の遺物・遺構であって、「桶屋町・小松屋」などと大書されたお通い徳利などには、直接に先祖を偲ばれる方もあろうかという資料でもある。可能な限り、整理作業を急いで、詳細な報告を公表することのできるように努めたい。

図版I 地図

名古屋都市計画基本図

日置から



元文三年 名古屋図
名古屋市史地図篇から
明治2年尾府全図

图1 西半部断面

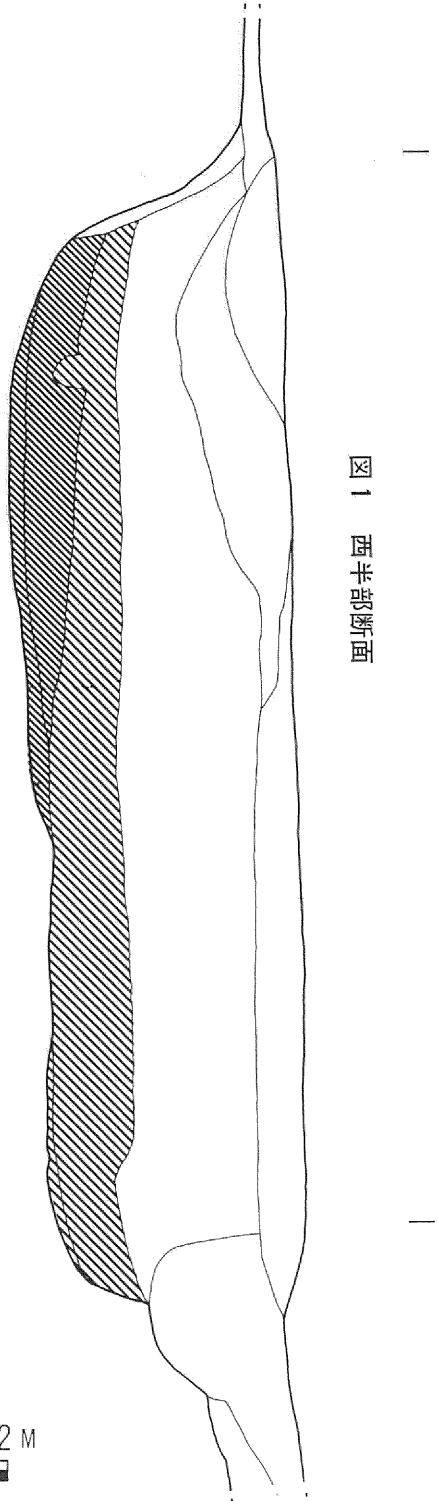
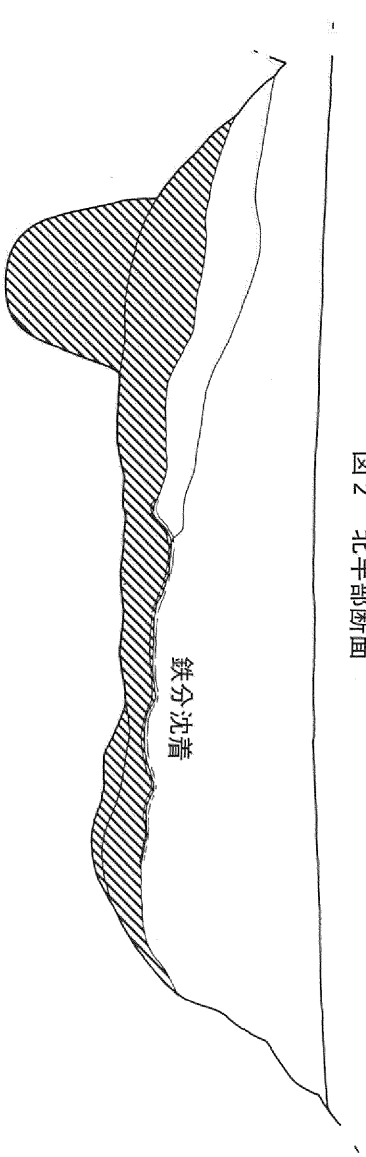
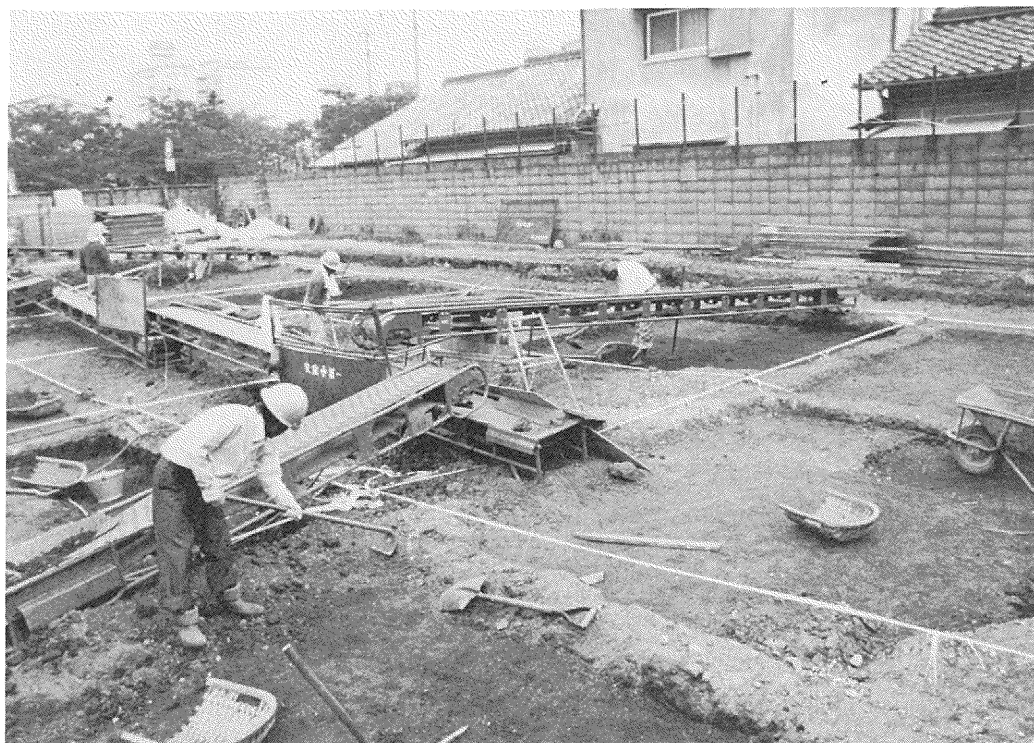
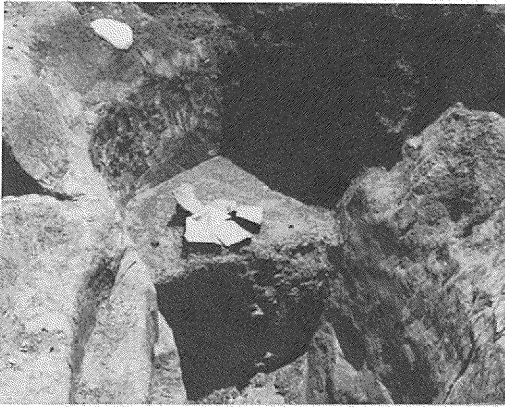


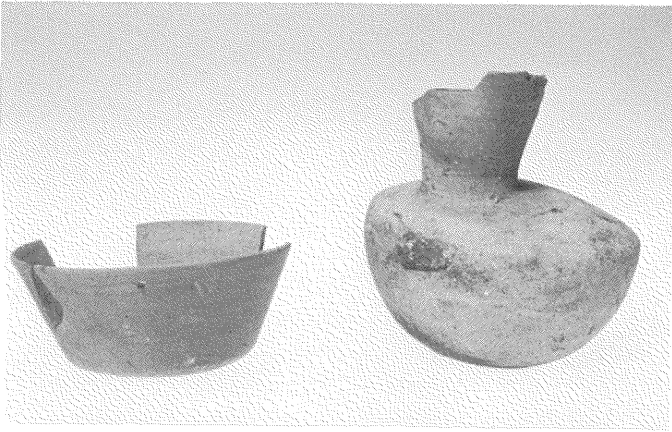
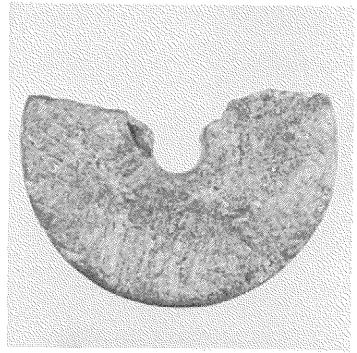
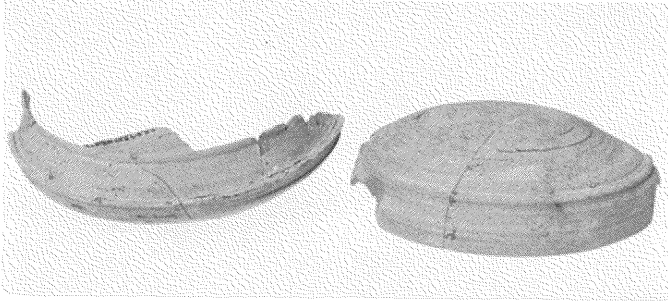
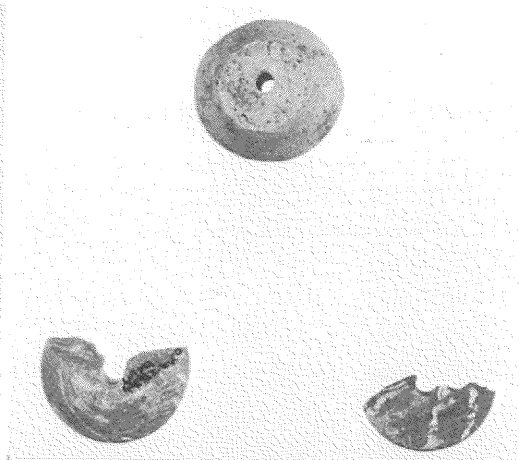
图2 北半部断面

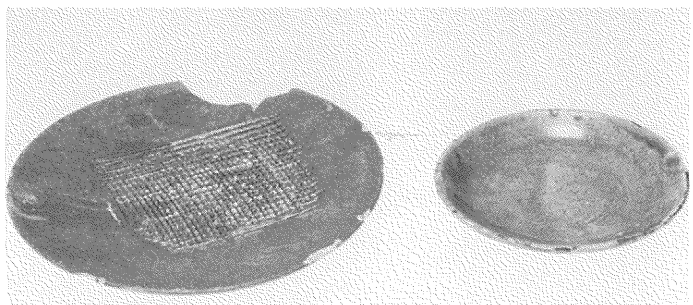
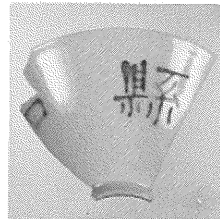
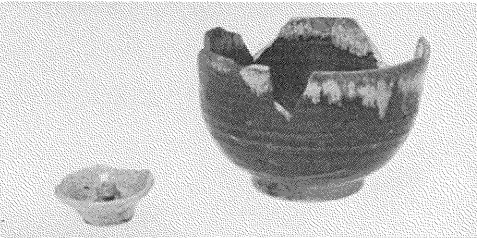
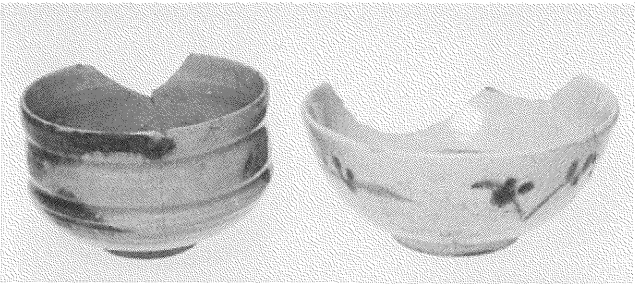






图版VI 遺物写真1





埋藏文化財調査概要報告書

1984年3月31日 印刷発行

発行 名古屋市教育委員会
編集
印刷 (株) 一誠社

